

学術振興会特別研究員申請に ついて

先進理工学部 物理学科 助手
長谷部研究室 所属
長岡 央

2014年度12月15日

経歴

- 2007年度(2008年3月)

早稲田大学 理工学部 物理学科卒業

- 2009年度(2010年3月)

早稲田大学 先進理工学研究科 物理学及応用物理学専攻 修士課程 卒業

- 2010年度(2010年4月)～2012年度(2013年3月)

早稲田大学 先進理工学研究科 博士後期課程 学術振興会特別研究員DC1

- 2013年度(2013年4月)～現在

早稲田大学 先進理工学部 物理学科 助手

- 2014年度(2014年4月～2016年3月)

科学研究費助成事業—科研費— 若手研究B採択

日本地球惑星科学連合大会 月と探査セッション 代表コンビーナ

日本惑星科学会 会員

目次

- **就職するか・進学するか**の決断について
学術振興会特別研究員という選択肢
- **採用のために必要な能力や業績**について
申請時の研究業績等
- **採用されやすい申請書の書き方**について
申請書作成の際に注意した点や、その他
- **採用によって、研究の幅が広がったか**
採用後の研究状況

就職するか・進学するかの決断について

1) 金銭面の問題

- これをサポートしてくれるのが、
学術振興会特別研究員という制度

2) 能力的な問題

- 学振研究員という肩書は精神的な成長も促してくれる

就職するか・進学するかの決断

1) 金銭面の問題への解決策

博士課程1年間にかかる費用

- 生活費10万円/月 × 12ヶ月 = 120万円
- 授業料40万円/半期 × 2 = 80万円
- 研究費: 旅費(国際学会30万円/1回) + 研究に関わる費用

学術振興会特別研究員に採用されれば

- 奨励費20万円/月 × 12ヶ月 = 240万円
- 大学からDC採用者支援奨学金60万円/年(予定)
- 科学研究費補助金 ~ 150万円/年

就職するか・進学するかの決断

2) 能力的な問題

自分が研究者としてこれらからやっていけるのか

- これはだれしもが持つ不安、これをこえて今の研究を続けたいという思いが進学につながった
- まず自分の研究がその分野でどう見られるのかを肌で感じるためにも積極的な学会・研究会への参加を行った

自分の研究に対してその分野からどうみてもらえているのか、自分の分野の発展性

- 修士の間は自分もこの不安をもちながら研究していた
- 学振に採用されることで、自信にも繋がるし、意識も大きく変わった

採用のために必要な能力や業績 について

- 学術誌への発表
- 商業誌への解説、総説
- 国際会議での発表
- 国内学会、シンポジウムでの発表
- 特許等
- その他(受賞歴)

応募締め切りが5月連休終わり

学振提出時の研究業績

- | | | |
|---------------------|------|------|
| • Proceedings (英文誌) | 筆頭1本 | 共著1本 |
| • 国際学会発表 | 筆頭1本 | 共著3本 |
| • 国内学会発表 | 筆頭1本 | 共著4本 |

- 論文掲載までには、少なくとも3か月～半年かかる
- 分野により研究成果には差がでる、その上で、自分がどの分野に申請するかも考える

申請、採用までの流れ

- 学部3年生時、2007年2月長谷部研究室配属
- 毎日夜10時頃まで研究室で論文を読んでいた(この時点から博士進学を決定)、2008年2月に卒業論文発表
- M1の4月に卒業論文の内容で査読付Proceedingsを執筆、投稿
➡M1の冬時に採録
- M1の夏に卒業論文の内容をもう少し発展させ、国際学会で発表
- M1終わり、2009年3月頃からちょこちょこ申請書を書き始める
- M2の5月に申請書提出
- M2の10月中旬頃採用通知 面接
- M2の12月面接試験
- 2010年度(2010年4月)～2012年度(2013年3月)

早稲田大学 先進理工学研究科 博士後期課程 学術振興会特別
研究員DC1

「採用されやすい申請書の書き方 について」

学振申請書の構成

- 1. 履歴書＋申請分野(2p)
- 2. 現在までの研究状況(1.5p)
- 3. これからの研究計画(2.5p)
- 4. 研究業績(1p)
- 5. 自己評価(1p)
- 6. 指導教官からの評価書

申請書で気をつけたこと

- 背景、目的、手法の話の筋を通す
- 研究手法の独自性を主張する
- 研究計画の妥当性、実現性を示す
- 無理過ぎず、2～3年で達成可能な内容で申請する
- 研究業績では空欄をつくらない
- 先生、ポスドクの方々に申請書をみてもらい、推敲を重ねる(提出の2～3週間前には準備)

1. 履歴書＋申請分野・細目

- これが申請書の表紙に成る
- 電子申請により入力
- 申請する分野はよく吟味すべき
- 内容が競合しそうな同世代の若手をリサーチするために、研究会や学会、シンポジウムには積極的に参加。近場の開催であれば、発表がなくても自費で参加しリサーチ

2. 現在までの研究状況

- 研究背景、課題点、研究目的と研究方法
- 現在までの研究状況（業績と絡めて）

3. これからの研究計画

- 研究の背景
- 研究目的・内容
- 研究の特色・独創的な点
- 年次計画

4. 研究業績

- 学術誌への発表
- 商業誌への解説、総説
- 国際会議での発表
- 国内学会、シンポジウムでの発表
- 特許等
- その他(受賞歴)

心がけたこと

- 書けるものはすべて書く、空欄をつくらない

5. 自己評価

- ①研究職を志望する動機、目指す研究者像、
自己の長所等
 - ・自分がこの分野をどれだけ好きなのかをアピール
- ②自己評価する上で、特に重要と思われる事項（特に優れた学業成績，受賞歴，飛び級入学，留学経験，特色ある学外活動など）
 - ・「多くの若手研究者とのふれ合い～2008年夏若手会にて～」

面接の話

- 自分の研究テーマを一枚のポスターにまとめ、限られた時間で内容を説明
- その後、質疑応答
- 面接時間は5分ほど、話す内容を完全に暗唱できるまで練習した
- 時間厳守が鉄則のよう

ポスター一例

採用によって、研究の幅が広がったか そのメリットとは

- 金銭面の負担がなくなる □ これはデカイ
- 研究費の運用・管理のノウハウが身につく □ より大きな研究費管理の練習にもなる
- 行きたい学会にいけるので、その分野の大御所に会える □ その先生が今後書く論文の査読者になる可能性も
- 今後の研究活動にもいろいろと有益 □ 共著に加えていただける、研究会からのオファーなどいろいろと関連分野に名前を憶えてもらえる機会が増える可能性が高い

学振提出時の研究業績

- 学会Proceedings (英文誌) 筆頭1本＋共著1本
- 国際学会発表 筆頭1本＋共著3本
- 国内学会発表 筆頭1本＋共著3本

現在の研究業績(DC1 関連)

- 欧文学術誌 筆頭2本＋共著1本＋1本投稿中
- 学会Proceedings (英文誌) 筆頭2本＋共著4本
- 国際学会発表 筆頭12本＋共著多数
- 国内学会発表 筆頭1本＋共著多数
- 獲得資金 科研費若手B＋外部機関補助費